

日本音楽教育学会 ニュースレタ - 第8号

Japan Academic Society for Music Education: News Letter No.8 2002 6/4

目 次

新会長挨拶	2
常任理事会・理事会報告	3
編集委員会報告	5
「院生連絡会」報告	5
平成13年度大学院修士論文題目	6
院生フォーラムのお知らせ	11
書籍紹介	12
海外セミナーのお知らせ	13
住所・所属変更及び新入会員住所	14
編集後記	18

お知らせ

くらしき作陽大学で開催される“くらしきゼミナール”(9月6日~8日)に関しては、同封の別刷でご案内させていただきました。多彩なプログラムと豊富な内容のゼミナールになることが期待されたおりますので、ぜひご参加ください。

“くらしきゼミナール”に関する最新の情報は、本学会のホームページでご案内しております。
<http://www.remus.dti.ne.jp/onkyoiku/index.html>

学会誌第32-1号は7月に発行いたします。

会長就任にあたってのご挨拶

村尾忠廣



この度、日本音楽教育学会会長に就任いたしました。よろしくお願ひいたします。

ふり返ってみれば、本学会の発足は1970年のことでした。東京芸術大学に大学院音楽教育専攻科が発足し、その第1期生として私が入学したのは1969年のことでしたから、その翌年ということになります。大学院修了後の71年に私は愛知教育大学に助手として赴任したのですが、その年、本学が主催校となって日本音楽教育学会第2回全国大会が開催されました。大会準備の下働きをしながらこの時、「吉田角太郎のリズム教育論にみられる宗教的療法性について」という研究発表をしました。同じ1期生の同窓、遠山文吉と共にジュリエット・アルヴァン女子から音楽療法を教わったことを反映した内容で、私のいわばデビュー論文でもありました。以来、30余年ずっと本学会に関わってきたことになります。当時は「音楽教育学」という言葉が実に新鮮でした。ドイツやアメリカではひと足先に「Musik Pädagogik als Wissenschaft」とか「Music Education Research」という用語法と共に「学」としての音楽教育研究が始まっておりましたから、私たちも何かすごく新しいことを研究開拓するのだ、と意気込んでいたように思います。「音楽教育学とは何か」というシンポジウムが開催されたのもこのころです。本当に、昨日のように思い起こされます。が、その間、歴史研究（音楽教育史）を中心として始まった音楽教育学も、実験、調査、分析、事例研究と多様化し、近年は授業改善を直接目的とする実践者＝研究者によるアクションリサーチも盛んにおこなわれるようになっていきます。教育という営みを研究の対象として客観的、科学的に実証しようとする研究を土

台としつつ、そこから教育の中に入り込んで内から特定の事象を特定として解釈しようとする研究へと発展してきている、と言ってよいかもしれません。問題は、学会発足時に主張された科学的実証主義的研究が欧米のように発展しないまま臨床的、実践的研究へとウイングを拡げてきている、ということです。臨床医は治療という現場の研究において科学的に数量化されたデータを使用します。音楽教育の研究で今注目されている実践研究「アクションリサーチ」においても実証され、数量化されたデータ、統計を使うのです。日本の音楽教育研究の弱点は、基礎研究、数量化されたデータの絶対的不足だと言ってもよいでしょう。コンピュータが一般家庭にまで普及し、音楽の創作、再生が急速にデジタル化してきている今日、日本の音楽教育研究者に少なからず潜在する「量的研究アレルギー」を克服する必要があります。それは、実践に肉薄した「音楽教育のための研究」を「学」として高めるために必要なひとつのステップでもあります。

日本音楽教育学会は、日本学術会議に登録されたアカデミックな「学会」であります。が、同時に教育実践に深く関わってゆく研究団体でもあります。二つの性格を互いに絡み合わせ、統合できる部分と交差する部分の理解を深めながら、よりいっそう実践的な個々の具体的なケースに対応できるような学会を目指してゆきたい、と考えております。もちろん、選挙の際に公約として掲げました「国際的な学会間の交流」、「情報化の推進」につきましては早速実行に移してゆく所存です。これからの3年間どうか、よろしくお願ひいたします。

平成 14 年度 常任理事会・理事会報告

平成 14 年度 第 1 回常任理事会

日時：平成 14 年 4 月 27 日（土）13:00～15:00

場所：東京芸術大学音楽教育研究室

平成 14 年度 第 1 回理事会

日時：平成 14 年 4 月 27 日（土）15:00～17:00

場所：東京芸術大学音楽教育研究室

出席：村尾・平井・坪能・筒石・浅井・伊野・今川・奥・加藤・北山・木村

小山・阪井・重嶋・杉江・中原・野波・藤沢・南・山本・吉富

欠席：伊藤・島崎・竹内・田辺・丸林・丸山

【報告事項】

1) 新役員について

常任理事・地区代表理事役務確認

編集委員・音楽文献委員・選挙管理委員の交代

編集委員：常任理事：杉江淑子 坪能由紀子，
理事：丸山忠璋 南曜子，音楽文献委員：今
川恭子（東京芸術大学）・斉藤博（国立音楽
大学）・本多佐保美（千葉大学），選挙監理
委員：藤沢章彦 中館栄子（国立音楽大学）

2) 第 32 回大会会計決算報告

東京芸術大学の山本前会長から中止となった沖
縄大会も含めて報告された。

3) 各種委員会報告

ア．30 周年記念事典編集委員会（山本理事）：
原稿がほぼ出揃い音楽之友社に入稿された。発
行は本年末の予定。

イ．編集委員会（加藤委員長）：学会誌第 32-1
号の発行が 7 月上旬になる予定。

ウ．音楽文献目録委員会（今川委員）：3 月末
に新旧合同の委員会が行われた旨報告された。

4) 各地区例会報告

13 年度終了

北海道：3 月 2 日（函館校）

東北：13 年 6 月（山形大）

関東：2 月 9 日（東学大）

北陸：2 月 16 日（金沢大）

東海：3 月 23 日（愛教大附属名古屋中）

近畿：3 月 9 日（滋賀大）

中国：2 月 23 日（松江リカ第 1 研修室）

四国：3 月 16 日（鳴門教育大）

九州：3 月 16 日（大分大）

14 年度予定

北海道：7 月予定

東北：11 月又は 12 月（秋田大）

関東：未定

北陸：未定

東海：6 月 29 日（静大附属浜松小）

近畿：5 月 25 日（奈良教育大）

中国：未定

四国：未定

九州：未定

【協議事項】

1) 平成 13 年度決算報告及び監査報告（杉江会計
担当理事）：資料に基づいて行われ、続いて会計
監査報告（重嶋会計監事）がなされ了承された。
会計報告は第 33 回大会プログラムに掲載。

2) 平成 15 年度事業計画案及び予算案について
平成 15 年度事業計画（案）

5 月中旬

平成 14 年度会計監査

平成 15 年度第 1 回編集委員会

平成 15 年度第 1 回常任理事会

平成 15 年度第 1 回理事会

6 月中旬

学会誌第 33-1 号発行

ニュースレター No.12

6 月末日

研究発表（口述）申し込み〆切

平成 15 年度第 2 回編集委員会

7 月上旬

第 2 回常任理事会

研究発表受理通知

8 月下旬

学会誌第 33-2 号発行

ニュースレター No.13

* 月 * 日（金）第 3 回編集委員会

第 3 回常任理事会

第 2 回理事会

* 月 * 日（土）第 34 回大会（神戸大学）

* 月 * 日（日）

〃

（* は未定）

12 月中旬

学会誌第 33-3 号発行

ニュースレター No.14

平成 16 年 2 月初旬

第 4 回編集委員会

平成 14 年度第 4 回常任理事会

3 月末日

学会誌第 33-4 号発行

ニュースレター No.15

平成 15 年度会計決算

以上の資料に基づき事業計画が事務局長
より出され、協議の結果承認された。

平成15年度予算案(杉江会計担当理事):
資料に基づき協議された結果例ゼミナ-ル
補助金の予算化(年15万円積立)をする事
が決まり了承された。また例会がますます
活性化しよう例会費を10万円アップされ
た。予算案は第33回大会プログラムに掲載
される。

3) 第7回音楽教育ゼミナ-ルについて(奥理事):
日時・会場・内容・参加費等について説明があり
会員には5月末に詳細と申し込み用紙を配布する
こととなった。

4) 第33回(金城学院大学)大会について: 日程・
プロジェクト研究等

プロジェクト研究に以下4件の応募があり採用
された。

- ・「音楽療法」を音楽教育の問題として考える
- ・アジア諸国の音楽教育制度に関する研究
- ・音楽科における学力観と評価について
- ・「音を聴く」ことへのメディア活用の可能性
について-バーチャルリアリティーとネットワーク
機能を使った小・中学校での実践を通して-

5) 第三次「学会運営検討委員会」の諮問事項に
ついて

- ・理事選挙における定数及び連記数の検討
 - ・会長の立候補制についての検討
 - ・事務局の幹事制度について今後の検討
- 上記等について会長委嘱により奥忍・阪井恵・
佐野靖・藤沢章彦の4氏が委員会を設けること
を承認された。

6) 二種類の学会(雑)誌の刊行について

研究的な物と実践的な物の二種類の学会誌を発
行することについて検討することとなった。検
討委員として坪能由紀子・加藤富美子・安田寛
の3氏が承認された。

7) 姉妹学会の締結について

韓国との姉妹学会締結について、交渉と検討委
員に筒石賢昭と小川昌文の2氏が承認された。

8) 新入会員及び退会者の承認

入会 正会員(13年度入会)

2989 深井 尚子 演奏家
2990 夏目奈美子 愛知教育大院生
2991 高見 仁志 兵庫教育大院生
2992 松永加也子 国立音楽大
2993 山本 美紀 大阪大院生
2994 高森 義文 玉川大
2995 渡辺 廣美 財)YAMA音楽振興会研究員
2996 太田 裕 尼崎市立上坂部小
2997 鯨井 正子
2998 山本 紀子 静岡大院生
2999 佐々木裕也 群馬大附小
3000 片山 珠代 静岡県立東部養護学校
3001 味府 美香 高知大院生
3002 熊坂 好孝 財)YAMA音楽振興会研究員
3003 岡村知由紀 高知大院生
3004 柱本 優 平安女学院大

3005 David G.Hebert 東京学芸大研究生
(ワシントン大)

3006 永井美保子 東京学芸大院生
3007 渡邊 厚美 東京学芸大院生
3008 黒川たまみ 東京学芸大院生
3009 小楠 智子 東京学芸大院生
3010 寺田巳保子 東京学芸大院生(都国際高)
3011 文 恵 暎 東京学芸大院生
3012 渋谷 創平 東京学芸大院生
3013 金 土 妍 東京学芸大院生
3014 趙 正 雅 朝鮮大研究員

(平成14年4月27日現在:1639名)

学生会員

B-45 木俣 晶彦 岐阜聖徳学園大

申し出退会者

1846 武田 實 函館音楽療法研究会
(ご逝去)

2107 会沢 義雄 北教大函館
564 中谷 弘 北教大釧路
2214 伏見 千晶 北標津小・中
1623 三浦 弘 北教大旭川
2491 佐川 馨 秋田県教育センター
127 高橋 幹彦 山形大
2705 森田 稔 宮城教育大
563 稲田 浩 県立浦和第一女子高
528 岩井 哲郎 文教大
746 川池 聡 三重大
2251 木斎 格 帝京大
1911 白井 森子
444 高川 進作 学習院幼稚園
2638 田村 美幸 群馬大院生
1253 塚田 雄二 武蔵野高
1419 西浦 直子
220 西澤 昭男 東京音楽大
2180 林 幸代 東邦音楽大附高
1316 林 祐次
2569 吉村 亜矢 信州大院生
2386 奥山 祐司 東濃教育事務所
2154 中川 明博 岐阜聖徳学園大院生
1152 今村 紘司 PL学園短大
1131 遠藤 晶 大阪教育大院生
499 熊谷新次郎 PL学園短大
2310 下清水陽子 桜井女史短大
257 中村 淑子 京都女子大
1038 堀 朋子 高田短大
857 米良 俊弼
791 藤井 貞子 就実短大
2744 石橋 万希 福岡教育大院生
1231 森本 雅子 下関女子短大
2839 吉田 直美 市立勝浦小

(34名)

9) その他

・後援名義使用について

「2002年度全日本電子楽器教育研究会シンポジ
ウム」の後援が承認された。

編集委員会からのお知らせ

学会誌編集委員会委員長 加藤富美子

・委員の一部交代について

理事の互選による委員，常任理事の互選による委員のそれぞれの任期が満了になったため，本年4月から編集委員の一部が下記のように交代いたしました。
(旧委員)杉江淑子 丸山忠璋 (新委員)
坪能由紀子 南曜子

・投稿論文の査読について

編集委員会では，これまで，より良い論文をできるだけ数多く掲載するために，場合によっては再査読，再々査読を行うという努力をしてきました。しかし，現実には査読が繰り返されることによるさまざまな弊害も出てきています。そこで，今後は，査読は再査読までとし，その結果をふまえて編集委員会で採択が可とならなかった論文については返却させていただき，改めての投稿を期待することといたしました。

・日本語要旨掲載によるレイアウトの変更について

第31-1号から「研究論文」「研究報告」については日本語要旨を掲載するようになりましたが，これによりレイアウト上の不都合が生じています。そこで第32-1号からは，1論文ごとにタイトル，日本語要旨，キーワード，本文，英文要旨の順序で配す

ることとしました。なお，投稿いただく際のそれぞれの規程のページ数，字数は，投稿規程に示した通りです。

・英文要旨について

投稿論文に付される英文要旨には，国際的に通用しない英文が数多くみられます。投稿規程にもとづき，内容の吟味を十分に行った上で投稿していただくようお願いいたします。

・学会誌第32-1号の発行について

学会誌第32-1号の発行が遅れましたことをおわびいたします。内容の充実をはかるために，編集上の都合から発行日を延期いたしました。

なお，現在会員各位からは多数の研究論文を投稿していただいておりますが，査読結果をふまえますと，学会誌への採択についてそのご意志に応えることができないものも多く，編集委員会としても苦慮しているところです。何とぞご理解をいただきますよう，重ねてお願いいたします。投稿論文の編集委員会における取り扱いの流れについては，ニューズレター第5号の「編集委員会からのお知らせ」をご参照ください。

~~「院生連絡会」報告 ~~~~~

去る4月28日(日)，今年度第一回目の「院生連絡会」が東京学芸大学を会場として開催されました。

「院生連絡会」とは，日頃音楽教育研究に携わっている関東近辺の大学院で学ぶ者が集まり，ネットワーク形成を目指すことを目的とした，自主的な活動団体です。これまでに，「研究交流会」や「バロックダンス研究」等の活動を行ってきました。

再結成をしてから今年で4年目をむかえます。今年度は，東京芸術大学，埼玉大学，千葉大学，横浜国立大学，東京学芸大学の5つの大学の院生で活動しています。

先日の第一回院生連絡会では，自己紹介の後，今年度の活動計画について話しあいました。その結果，以下の5つの活動を今年度の活動計画としました。

- * 講習会の開催
- * 学校教育現場との交流
- * 研究交流会の開催
- * ニュースレターの発行
- * 演奏会の開催

~~~~~ 島田沙苗(東京学芸大学修士2年) ~~~~~

# 平成 13 年度大学院修士論文題目

北海道教育大学 札幌・岩見沢校

玉木 裕 音楽科における教授 = 学習過程の諸相  
- 意味の伝達・解釈 の視点による分析 -

北海道教育大学 釧路校

山崎 美幸 呼吸法・発声法とその実践的考察  
- 中学校における効果的な指導法のあり方 -  
佐藤 瑞穂 ウィーン古典派・前期ロマン派時代のピアノの機能比較  
- ベートーヴェンのピアノ作品を背景として -

岩手大学

石川 和広 児童発声の歴史および実践的研究  
- 自然な発声を引き出す指導法を探る -  
猫塚千恵子 音楽科の基礎能力指導に関する一考察  
- コダーイ・メソードにおける内的聴感育成の視点から -

山形大学

佐藤実華子 中学校におけるクラブ活動への導入を目的としたフルート・メソード  
関本 和江 小学校における読譜指導に関する一考察  
- リズム読譜と身体運動との関連性を基に -  
高橋 陽子 小学校音楽科・器楽指導における教師の指 観に関する研究

群馬大学

阿佐美和香子 問題解決能力の育成に関する研究  
- 中学校の調査資料及び音楽授業分析を中心として -

茨城大学

佐藤 礼子 動きのイメージに基づく創造的な表現活動に関する一考察  
- 音楽劇の製作過程を通して -  
宮本 理沙 ヴェルディ作曲オペラ「椿姫」のアリアに関する演奏研究

宇都宮大学

菊地由記子 S. プロコフィエフ《ヴァイオリン・ソナタ第2番 Op.94 a》における演奏法考  
白金 法文 クラリネットの発展と作品との関連から見るモーツァルトについて  
西脇 正智 ベル・カント唱法における換声区の研究  
福田 純子 A. シュニトケ研究 - 多様主義の特徴と変遷 -

千葉大学

勝又久々紀 音楽を愛好する心情を育てる身体表現に関する一考察  
桐原 礼 自国の音楽と諸民族の音楽に関わりを持たせた学習への可能性  
- スペインの音楽を例にして -  
平澤 直子 発声に関する研究 - 学校教育における現状と方向について -  
王 州 中国福建省における小学校、中学校音楽教育の器楽教育の状況とその理念  
田村さやか 音楽的能力の形成と初期教育  
- 才能教育研究会と桐朋学園大学音楽学部附属「子供のための音楽教室」 -  
宮奈 香織 自作曲における教材研究 - 学習指導要領・教科書教材の分析を通して -  
宮本 和久 小学校高学年におけるスカの教材化

埼玉大学

- 橋本 直子 初等音楽科教育における身体表現の「動き」に関する一考察  
- 「表現」と「コミュニケーション」の視点から -
- 藤川 英子 小学校における歌唱の指導に関する一考察  
- 教育カウンセリングの視点を生かして -
- 細井 涼子 音楽科教育と異文化理解についての一考察  
- 異文化理解を志向する音楽科授業の視点 -

東京芸術大学

- 木村 充子 音楽基礎教育としてのソルフェージュの意義とその方法  
- 音楽的な自立を目指す専門教育のあり方 -
- 海老原 光 指揮者としての教師 - 音楽科教師の「指揮者性」に関する位置考察 -

東京学芸大学

- 森岡美菜子 音楽科における評価の在り方 - 新しい学力観における評価の一考察 -
- 伊藤 由貴 音楽科の授業におけるコミュニケーションの構造と分析
- 山本 陽子 学校教育における音楽科教育の果す役割  
- 生涯学習の視点から見た小学校音楽科教育 -
- 衣 梨 中国の音楽教育におけるコンピュータの活用  
- 長春市の音楽教育改善を目指して -
- 松本 晴子 音楽療法の理念と方法を応用した音楽教育

武蔵野音楽大学

- 佐藤 愛子 幼児の表現活動における教師の役割に関する一考察  
- 2～5歳児の観察を通して -
- 丹生まゆみ 舞台芸術の鑑賞についての一考察 - その意義と教育との関わり -
- 西 かおり 聴く耳を育てる音楽鑑賞教育のありかた
- 西田 治 文化的価値観の変化と日本の音楽教育  
- 西洋中心主義から文化相対主義への変化に着目して -
- 森山 祐子 小学校音楽科における基礎的能力の育成に関する一考察

国立音楽大学

- 鯨井 正子 「茶目子の日」はなぜ愛好されたのか  
- 佐々紅華の音楽活動と子どもたちの受容を通して -

洗足学園大学

- 斉藤 啓史 音楽教育における即興演奏の方法論的研究
- 関 しのぶ 表現活動における日本の伝統音楽の題材開発の研究
- 中沢 祐子 苦手意識を克服する音楽の授業 - 他教科との関連を図って -
- 長根 理香 生徒の主体的な表現を促す「関わり」の研究  
- 音楽の授業における、教師の治療的資質の必要性について -
- 橋本 真由 器楽アンサンブルの意義に関する研究  
- 思春期における化面性の必要性に着目して -

山梨大学

- 新海 節 生涯学習のためのピアノテキスト  
- 大学生を対象としたアンケート調査に基づいて -
- 吉原 太郎 電子音楽メディアの変遷と展望における一考察

横浜国立大学

- 山本 敦子 子どもの「学び」を中心とした音楽科教育の研究  
学習観の検討を通して
- 朴 信美 韓国と日本における音楽科教育課程の比較研究  
中学校の音楽科教育課程を中心に

新潟大学

- 腰山みずえ 音風景選定事業から考察するサウンドスケープの可能性
- 田村 範子 文化会館における市民参加型事業について - その意義と課題 -

上越教育大学

- 魚成 彩子 公立中学校音楽科教師という存在  
- コミュニケーションとしての音楽教育 -
- 小黒美恵子 個性重視の理論に基づく音楽科教育の研究  
- 授業における歌唱活動を中心として -
- 黒澤 雅道 群馬県都市部における生涯音楽学習活動に関する事例研究  
- ジュニアオーケストラ活動を中心として -
- 小見山豊一 児童におけるリズムの認知・再生能力と音楽的感性・嗜好との相関
- 堀川 美紀 小学校音楽授業における学習課題把握のための教師の指導
- 山本 環 音楽科教育における音楽づくりの変遷と在り方  
- 「創造的音楽学習」から現在の「音楽づくり」の実践を中心として -

富山大学

- 石橋 妙子 和太鼓を取り入れた音楽科教育の可能性について
- 坂田美沙都 読書困難者を支援するIT技術の現状と今後の方向  
- デジタル録音図書教育上の活用 -

金沢大学

- 大倉 裕美 音を介したコミュニケーション - 養護学校と音楽教育 -
- 粕谷 雪子 コダ - イ・メソ - ドの有効性  
- ソルフェージュを中心にした実践に基づく考察 -
- 中山 知子 「日本人離れ」と「日本人らしさ」日本ピアノ教育の問題点

信州大学

- 佐藤 雅美 チェロの起源及びボウイング
- 板野 晴子 音楽教育における旋律の即興に関する一考察  
- ジャック・ダルクローズとコダーイ・ゾルターンのメソッドを視点として -
- 大室扶美子 生理的にバランスのとれた発声器官を保つ為の歌唱における一考察  
- 現代生活及び教育における種々の発声指導上の問題点 -
- 土屋 亜也 大脳生理学的見地からの音楽教育の一考察  
- 日本人と西欧人における音の認知の相違から -
- 刊 洪源 日中の小・中学校音楽教育に関する比較教育的考察  
- カリキュラム内容を中心に -

静岡大学

- 伊勢真記子 ソプラノ歌唱法研究  
抑制された身体からの脱出  
アレクサンダー・テクニクを取り入れた歌唱法の研究
- 塩川由希子 ピアノ演奏研究  
ドイツのピアノ教育について ムジークシューレとピアノ教則本

- 高久 新吾 ピアノ演奏研究  
ベートーヴェンピアノソナタ作品27における指導上の留意点
- 横田 聖 ピアノ演奏研究  
音楽教育においてポピュラーソングを用いることの功罪
- 紅林 麻紀 障害児における音楽教育の役割 音楽療法との比較を通して
- 愛知教育大学  
夏目奈美子 乳児の音声発達に関する研究 - 「音楽的喃語」の発現をめぐって -  
古川美智子 ある学習障害児のコミュニケーション能力の発達を促す音楽的アプローチ  
山田 育代 箏曲における歌と箏の同音対応の関係についての実証的研究  
今津 恵美 老人性痴呆患者のための集団音楽療法  
- 残存能力を生かすりハビリの試み -
- 岐阜大学  
大内 洋子 教育における異文化理解からのアプローチ  
- 「諸民族の音楽」学習を通して多元的価値観を形成することを中心に -  
近藤 洋美 幼稚園教育における音楽のあり方に関する一考察  
- 調査を通して見た自由・設定保育の間における音楽のあり方 -  
長谷川智美 イタリア・オペラにおけるソプラノアリアの一考察  
夫馬 千智 ショパン《ピアノソナタ第3番口短調 作品58》の演奏解釈に関する  
- 考察 - 息遣いを読む -  
吉岡 香織 シューマン《ファンタジー作品17》第1楽章の楽曲分析
- 京都教育大学  
藤田 加代 小学校音楽科における民俗芸能教材化の試み  
- 京都中堂寺六斎念仏を例として -  
中島みどり 幼児期・児童期のピアノ教育が音楽学習意識に与える影響  
- 大学生および専門学生を対象とした調査に基づいて -  
瀬 浩明 学校吹奏楽における演奏表現の教授法  
- 現状の分析からエネルギー思考の教材へ -  
大村 幸子 初級期の子どもへのより効果的なピアノ指導法  
- 個人指導における教師の働きかけの分析を通して -  
藤原みつる 中学校音楽科における日本歌曲の意義に関する一考察  
- 1970年からの学会誌及び教育雑誌の分析を通して -  
小林 知子 京都府の消化教育における黎明期
- 大阪教育大学  
東郷亜由美 歌唱教育における声の扱いについて  
西嶋 恵 日本語の歌唱について - 発音の問題を中心に -  
上田 由紀 身体コミュニケーションに着目したリコーダーアンサンブルの指導  
越智 友子 L. パーンスタインのレクチャーコンサートにおける鑑賞の方法原理  
成瀬 紀子 ピアノ教育における「パーナム・ピアノテクニク」の有効性  
小川 由美 学校教育における〔民族音楽〕の教材化に関する考察  
- 文化的脈絡をふまえた指導実践を通して -  
本間 由美 知的障害児の音楽づくりにおけるコミュニケーションの変容  
矢部 朋子 音楽の授業にみられる子どもの音楽的発達の様相  
- 第三学年と第四学年の学年的発達の違いに着目して -
- 奈良教育大学  
豊島久美子 Alzheimer病患者における音楽療法効果の検証 - 内分泌学的研究 -

- 森長はるみ 遊び心を起因とする音楽表現の生成とその指導法開発  
- 中学校音楽科授業を対象に -
- 大門 玲子 初心者にとって鳴りやすいオーボエリードの傾向  
徳永多英子 声楽レッスンにおける音楽表現の向上とその要因  
- 参与観察とインタビューを手がかりに -
- 大井 雅博 重度重複障害児の音楽科教育における教員の実践意識  
- 指導と評価に対する実態調査を通して -
- 岡山大学  
金草 智子 「理解」を目的とした音楽の授業の再設計  
- ウィギンズとマクタイによる「逆からの設計法」に基づいて -  
田邊 美佳 音楽による生涯学習 - 生涯音楽学習についての一考察 -
- 鳥取大学  
畦内 真希 音楽を媒体としたコミュニケーション  
- 知的障害児を対象とした事例をもとに -
- 島根大学  
石井 亜紀 日本におけるドビュッシーの音楽の受容について  
泉 寿子 「対照性を」を基軸とする西洋音楽の作品分析比較研究  
井野木広光 トランペットの導入時における指導法に関する一考察  
住田 友宏 ピリオド・アプローチによるベートーヴェンの交響曲演奏に関する一考察  
福田 悦子 ヴァイオリン初学者への指導法に関する一考察
- 山口大学  
徳田 修二 初等音楽科教育における言語的アプローチによる課題学習の構想と実践  
岡本 美恵 健常児のコミュニケーション能力育成のための即興演奏の意味と可能性  
山本奈帆子 生涯学習としてのピアノ学習の実態  
- 学習の観察とアンケート調査をもとに -  
陣 敏 中国の「少年宮」における音楽教育の研究
- 鳴門教育大学  
四宮 恭子 前青年期の子もたちの知的好奇心と有能感をゆさぶる歌唱指導の構想と実践に関する研究  
- 子どもたちの音楽生活と音楽科の学習の統合をめざした授業づくりを視点として -  
山下 怜子 音楽科の関わった「総合的な学習」にみる子どもの表現の変容についての研究  
- 外的世界と内的世界と表現の世界の相互作用に注目して -  
川畑 啓子 音楽科における主題構成による単元開発の研究  
- 新しい学力観に基づいて -
- 愛媛大学  
安部あゆみ ピアノソナタの変遷における一考察  
- ベートーヴェンとシューベルトのピアノソナタを中心に -  
渡邊 沙織 G. カッチーニ『レーヴェ・ムジケ』に関する一考察  
- 歌唱法について -
- 長崎大学  
永留和歌子 音楽科における創作領域の効果的な指導についての研究  
- 発達段階に応じた授業のあり方を考える -  
原田 理香 中学校・高等学校の吹奏楽部におけるホルンの指導法について  
- 指導実践の観察を通して -

熊本大学

土井 恵加 G. ヴェルディの中・後期の作品を中心としたオペラの研究  
- ソプラノのヒロインに与えられた音楽の演奏法と役割についての一考察 -

宮崎大学

阿部由加子 中学校音楽教育における鑑賞教育に関する研究  
- 学習指導要領の分析を中心として -

琉球大学

平成 13 年度 (9 月) 修了

中地 涼子 音楽鑑賞における雰囲気指導用教材開発  
- バレエ映像を用いた鑑賞の効果とその可能性を求めて -

儀間 綾子 鑑賞共通教材の変遷に関する歴史的研究

13 年度修了

伊佐 寿香 「総合的な学習の時間」における音楽科の役割

周 霞 中国の伝統楽器二胡による沖縄の音楽教材開発

## 院生フォーラムのお知らせ

# 研究展示募集

全国の大学院生の皆さまへ

この度、東海地区の音楽科、音楽教育科に所属する大学院生を中心に、院生による院生のためのフォーラムを開催しようと、院生フォーラム準備委員会が発足いたしました。そして話し合いの結果、日本音楽教育学会学会第 33 回全国大会（金城学院大学）の院生フォーラムは、全国の院生がお互いの研究計画や成果を掲示板に貼って披露し、自由に意見を交換しあう場とすることになりました。

下記の要領で行いますので、ふるって御参加下さい。このフォーラムが私達院生の相互理解を深め、さらなる研究の活性に役立てる機会となることを願っています。

1. 参加資格は、現役院生、あるいは修了後数年を経た元院生で、大会参加費（学会費ではない）を納めることが条件です。
2. フォーラム会場の雰囲気として、小中学校での自由研究の展示風景を御想像下さい。展示物はポスター風で、言いたいことが一目でわかるようなものを歓迎します。展示物の大きさは、後程お知らせします。
3. コンピューター・ビデオ・ラジカセを使用する際には、事前に登録があれば使用可とします。
4. 研究成果の発表というより、むしろ今やっていること、これからやっていきたいことを発表しあう場にしたいと考えています。
5. 日時：2002 年 11 月 9 日（土）13:00-14:30
6. 場所：（愛知県）金城学院大学ランドルフ記念講堂のロビー

お申し込み・御質問は、[asamichi@d1.dion.ne.jp](mailto:asamichi@d1.dion.ne.jp)（浅見）までご連絡ください。一人でも多くの方の参加をお待ちしております。

院生フォーラム 2002 準備委員会  
委員長 浅見浩（愛知教育大学院生）

## 昨今の身体論をめぐって

伊野義博（新潟大学）

このところ、身体を通して習得する「わざ」や、日本の伝統的な「型」の学習が注目されている。昨年発行された『声に出して読みたい日本語』（斎藤孝，草思社）は、依然人気の書だ。ここで主張されるのは日本の伝統的な暗誦・朗誦文化であり、身体に染み込ませる「型」の文化である。研究の対象を日本にしている私にとって、伝統的な学習法が多くの人から注目を浴びてくるようになったことをうれしく思う反面、単なるブームで終わってしまうのではないかと不安にもなっている。また、「昔は良かった」といった懐古的な思いや、戦前の教育思想に直結させる風潮もあるようでこわい。「ブーム」は表層的な現状であるが、その裏には時代の本質的な問い直しが存在しているように思う。ブームに押し流されることの危険を敏感に察知しながら、その奥に潜む真実を感知せねばなるまい。今必要とされるのは、伝統的な教育と真正面に向き合い、現代における「意味」を明らかにし、未来へとつなげる作業であろう。

『「学び」の復権 - 模倣と習熟』（辻本雅史<sup>注</sup>，角川書店）が説くのは、近世の日本が確立してきた伝統的な学習文化である。そこでは「身体的な模倣と習熟」を核とし、「わざ」を習得していく学習者主体の学びが、儒者貝原益軒の学問と思想を例に紹介されている。またこうした考察をもとに、現代の学校における学習文化の種々の問題が解き明かされる。

「型」の学習や「模倣」の意味については、『「わざ」から知る』（生田久美子，東京大学出版会）が大きな示唆を与えてくれる。生田は日本の伝統芸道、武道の「わざ」習得における学習者の認知プロセスに焦点を当て、「身体全体でわかっているわかり方」の意味を明らかにするとともに、われわれが立脚してきた「近代的な知」のパラダイム変換をせまっている。

この生田の研究と呼応しながら、社会的学習過程としての身体技法について論究した論文集に『身体の構築学』（福島真人編，ひつじ書房）がある。そこでは、民俗芸能、大衆演劇、古典音楽といった種々の教授—学習の実際や「わざ」伝授の形態の有り様が詳細に語られている。

こうした研究は音楽教育をも巻き込み、音楽を学習するということに対するわれわれの暗黙の了解を今一度疑問視あるいは場合によっては崩壊させ、新たな学習観や方法論の構築を要求してくる。明治以来続いてきた西洋近代を基盤とした音楽教育の方法が、根底から問い直されているといってもよいだろう。

日本の伝統音楽の教育法については、梅本堯夫の研究（「邦楽の伝統的教育法」『アブサラス 長廣敏夫先生喜寿記念論文集』音楽之友社）をはじめ、多くの貴重な発表がある。こうした研究においては、師匠の師範を模倣し、繰り返しながら「型」を身に付け、習熟にいたるといった学習の特性や、「教えない」という教育の意味が追究されている。

音楽教育の実践場面においては、唱歌（しょうが）の活用をはじめ、「書かれたもの（楽譜）」の利用に対する課題も指摘されてきた。しかし学校の音楽授業において日本の伝統音楽をどのような姿勢で教授・学習すべきか、という点については、生田の指摘する「新たな知識観」や、近代が立脚してきた主観や知の世界についての問い直しが根底に存在するが故に、未解決のままとなっている。この問題の大きさは、例えば「型」を重視する日本の伝統音楽が、学校の「音楽室」に入ったとたんに生ずるであろう種々の課題を想定するだけでも理解されよう。

こうした課題に対しては、理論研究よりもむしろ実践研究の方が進んでいるかもしれない。この点『民俗音楽の底力』（日本民俗音楽学会編，勉誠出版）には、地域や学校の様々な実践が詳細に紹介されており、興味深い。我々は実践という事実や、優れた教師の直感と経験からも真摯に学ぶ必要がある。

以上、昨今の身体論をめぐって、書籍を紹介しながら思うところを書かせていただいた。

-----  
注)「辻」の字は正しくは しんにゅう の上にもうひとつ点が付きますが、ワープロに字体がないため「辻」で代用させていただきました。(編集担当)

## May Day Group 主催音楽教師のための講習会

「音楽教師教育の改革：最近の動向と新たなる方向」



日時：2002年6月10日～14日

場所：マサチューセッツ大学アマースト校

コーディネーター：J.Terry Gates, Thomas Regelski

ホスト：Rodger Rideout

参照 URL：<http://members.aol.com/jtgates/maydaygroup/amherst.html>

小川昌文（上越教育大学）

6月の10日から14日まで、アメリカのマサチューセッツ州のマサチューセッツ大学アマースト校にて、May Day Groupが主催するセミナーが開催されます。May Day Groupは、1993年に結成された、現在の音楽教育のあり方を根本的に見直し、改善することをめざして結成された音楽教育の研究者の集団で、これまで10回の研究会が北米をメインに開催されています。今回は、純粋な研究会ではなく、啓蒙的な側面も含めた「講習会」として開催されるセミナーです。

プログラムの詳細は下記の通りですが、このセミナーの特色は次の点に集約されます。

1. 発表の後に参加者を交えた長時間の討議があり、これを1つのユニットとしていること。1ユニットにつき、午前、午後すべての時間が割当てられ、十分な討論の時間が確保されています。つまり、発表は議論のための糸口であり、それ自体で完結するものではないというコンセプトが読み取れます。

2. 発表者は、北米を代表する著名な学者であり、論客であること。David Elliott, Thomas

Regelskiらわが国でもおなじみの研究者に加え、アメリカやカナダの実力派研究者が顔をそろえています。ここに出席するだけで、北米における音楽教育研究（質的研究）の最先端の情報が得られます。

3. 最新の思想の動向を踏まえ、音楽教育に応用する具体的な方法が多方面から提案されること。「批判哲学」をベースとして、「ジェンダー」「プラクシス」などの現代の思想を踏まえ、いかに音楽教育の実践に応用していくのか、様々なアプローチが（心理学、教育学etc.）ここで紹介されることが期待されます。決して「思想の遊び」に陥らないような配慮がされていると思われま

す。このセミナーに興味のある方は、上記のURLをご参照ください。とかく、「顔見せ」「お祭り」「実績作り」といった色彩が見られるセミナーや研究会が多い中、自身の問題意識を鮮明化し、音楽教育へのポジティブな考え方を確かなものとしたい人にはこのセミナーは、極めて有意義なものとなることが期待できます。

## May Day Group 主催音楽教師のための講習会プログラム

### 基調講演

Richard Colwell 「音楽教育の基礎と方法：変化のための戦略」

### 講演と討議

#### ユニット1

Sandra Stauffer 「音楽教師教育：なぜ今変化か？」

Terry Gates 「次世代の教師教育」

#### ユニット2

Jack Heller 「心理学の滑りやすい坂：認知研究と音楽教育」

Roberta Lamb 「音楽教育研究におけるジェンダー」

#### サブトピック

「テクノロジーと作曲分野における若年女性」( Kristine Burns )

「音楽教育における男と男性性」( Patricia O'Toole )

「音楽教育のフェミニストポストモダンの分析」( Elizabeth Gould )

「産業が音楽教育のジェンダー，階層，人種差別に及ぼした影響」( Julia Koza )

「フェミニズムとしての演奏者，教師，運動家」( Monique Buzzarte )

#### ユニット3

Wayne Bowman 「多様・多種・変化の中の音楽教育：21世紀の『哲学的基礎』に向けて」

Thomas Regelski 「カリキュラム理論とプラクシス」

#### ユニット4

Marie McCarthy 「音楽教育における社会学的展望」

David Elliott 「音楽教育研究の危機，問題，そして可能性」

### 全体討論

「基礎とカリキュラム：何が変わったのか」司会：Thomas Regelski

「変化への方略：次のステップは？」

住所・所属変更及び新入会員住所（4月承認まで）2000年度版 NO.5 4月30日現在

----- 編集後記 -----

ニュースレター8号をお届けします。原稿をお寄せいただきました会員の方々、ありがとうございます。日頃原稿の督促を受ける側に立つことが多い自分が、催促する側になるのはどんな気持ちかしらと思っていましたが、みなさんほとんど遅れることなくお送りいただきました。また、すべての原稿を集約して実際の編集作業をしていただいた北山先生、ありがとうございました。

今号では、小川昌文先生に今夏、外国で行われるセミナーについて紹介していただきました。また、関東地方の5大学の院生が集まって行っている「院生連絡会」の話をちょうど耳にしましたので、それについても書いていただきました。今後も、音楽教育に関わるこうした情報、あるいは出席への呼びかけなどを会員のみなさんからどんどん送っていただき、魅力的な情報が満載されたニュースレターになればいいな、と思っています。（坪能由紀子）

7号からニュースレターの編集とレイアウトを担当しております。作業にはマッキントッシュを使っており、執筆者の方からメールの添付書類で送っていただいたテキストファイルをEGWORDで編集し、出来上がったものをPDFで保存して印刷会社にするという手順を取っています。原稿をお送りいただく際には、テキスト形式のファイルでお送りいただくと助かります。どうぞよろしく願いいたします。（北山敦康）

-----

日本音楽教育学会 役員（2002～2004年度）

会長：村尾忠廣 副会長：平井建二・坪能由紀子

常任理事：筒石賢昭（事務局長）、奥忍・藤沢章彦・北山敦康（総務）、

加藤富美子・島崎篤子・丸山忠璋（企画）重嶋博・杉江淑子（会計）

地区代表理事：浅井良之（北海道）、丸林実千代（東北）、藤沢章彦（関東）、

伊野義博（北陸）、南曜子（東海）、中原昭哉（近畿）、野波健彦（中国）、

田邊隆（四国）、木村次宏（九州）

【事務局住所】184-0015 東京都小金井市貫井北町2-5-22 ハイツシーダ1-102

【私 書 箱】184-8799 東京都小金井郵便局私書箱26

Tel/Fax 042-381-3562 E-mail : onkyoiku@remus.dti.ne.jp

<http://www.remus.dti.ne.jp/onkyoiku/index.html>